

子どもの本 研究会



【私の一冊】

『君たちはどう生きるか』 吉野源二郎 著

(岩波文庫、一九八二年)

小山一行

仕事の都合で家に居ることが少ないので、たまに帰ると三歳を過ぎた孫娘ががみついて離れない。絵本の読み聞かせなど気取ってみるが、孫の方は体を動かすことに熱中して、関心は瞬時に次の目標へと突進する。もう少し落ち着いてきたら、と気を取り直して、自分が少年時代に出会った本について振り返ったとき、真っ先に浮かんだのが本書である。

この本が初めて出版された一九三七（昭和一二）年は、盧溝橋事件に端を発した日中戦争が拡大の一途をたどりはじめる年であった。次第に戦時色を強めていく時代の中で、未来を担う子供たちに希望を託す思いで書いたと作者は記している。丸山真男は、これは一種の「人生読本」であるが、決してモラルを強要するための道徳教本ではなく、いわば自分と世界との関係をどう認識し行動するかという問題を、中学一年生の主人公の日常を通して問いかけた「少年用図書の古典」であるという。

私がこの本にめぐり会ったのは中学生の頃だと思うが、小論を書くために改めて読み直してみると、内容はほとんど覚えていないことに気づく。しかし、本田潤一という名の少年が「コペル君」と呼ばれるようになったいきさつや、その名をつけた「叔父さん」への憧れに似た感情は、今でもはつきりと思い出すことができる。「叔父さん」というのはコペル少年の母親の弟で、この青年がコペル君の経験するさまざまな出来事や友人との葛藤などに対して広い視野から助言をし、ときには厳しくしかりつけ、少年の個人的な経験の持つ意味を、人類の歴史や文明の発展という視野から深く考えさせてゆく役目を果たしているのである。

今、主人公の年齢は遥か忘却の彼方に去り、「叔父さん」の年さえ昔話になりつつある自分を顧みると、年を重ねた者として後から来る子供たちに何を託せるのか、という問いが頭をもたげるのである。

(武蔵野大学教授)